PISA IN FOCUS 24

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

生徒は学校についてどう思っているのだろうか？

- ほとんどの生徒は、学校で学んだことが自分に、または自分の将来にとって役立つと考えている。
- 学校に対する生徒の態度は、読解力と関連している。
- 学校の雰囲気が学習を促していると回答した生徒は、学校に対してより前向きな態度をとる傾向がある。

学校教育に対する生徒の態度は、教師、同級生、または学校の雰囲気などに影響されることがある。PISA2009年調査で明らかにしようとしたのは、15歳の生徒が、学校で学んだことは、当面も将来においても、自分にとって役立つと感じているか、ということだった。調査では、今まで学校で学んだことについて、生徒が「学校を出た後の社会人としての生き方については、あまり教えてくれなかった」「学校なんて時間の無駄だった」「学校は、決断する自信をつけてくれた」「学校は、仕事で役に立つことを教えてくれた」という文章それぞれについて、どのくらいあてはまるかを回答させた。生徒は、それぞれの文章について、「まったくあてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」「どちらかといえばあてはまる」「とてもよくあてはまる」のいずれか一つに○をつけるよう求められた。

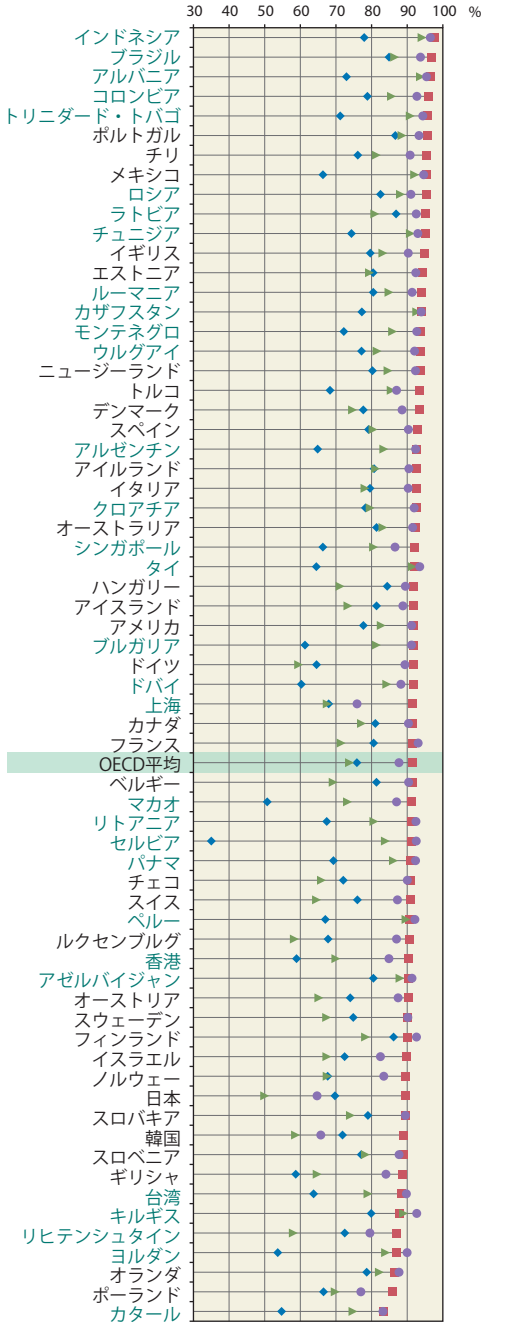
ほとんどの生徒は学校が役立つと考えている…

OECD平均で、生徒のほぼ10人に9人が「学校なんて時間の無駄だった」とは考えておらず（91%）、「学校は、仕事で役に立つことを教えてくれた」と回答している（88%）。また、約76%の生徒が「学校を出た後の社会人としての生き方について」教えてくれたと考え、74%が「学校は、決断する自信をつけてくれた」と回答している。

概して生徒は学校に対して前向きな態度を示したが、生徒の認識には国によってかなりの違いがある。例えば、アルバニア、インドネシア、カザフスタン、メキシコ、タイ、トリニダード・トバゴ及びチュニジアでは、90%を超える生徒が「学校は決断する自信をつけてくれた」と考えている一方で、ドイツ、日本、韓国、リヒテンシュタイン及びルクセンブルクでそう考える生徒は60%に満たない。但し、そのような質問に答える場合、異なる国の生徒が必ずしも同じ意味で回答しているとは限らない。

PISA IN FOCUS

生徒は学校が役に立つと考えているのだろうか？



…そして学校を役立つと考える生徒は、成績が優秀な傾向がある…

ほとんどの国で、学校が役立つと考える生徒はPISA調査の読解力で得点が高い傾向があり、また、読解力で高得点の生徒は学校が役に立つと回答する傾向がある。48か国・地域で、読解力で良い成績を収めた生徒は、得点が低い生徒よりも学校に対して前向きな態度を示す傾向が見られた。わずかながらも負の関係が見られたのはドイツ、ギリシャ及び上海だけだったが、ドイツとギリシャについては、その関係のほとんどが生徒及び学校の背景要因によって説明される。

…そして教師と良い関係を築き、学習を促すクラスで勉強している傾向がある。

調査に参加したすべての国・地域において、生徒の学校教育に対する前向きな態度は教師に対する前向きな態度と関連している。学校の先生について、「私はたいていの先生とうまくやっている」「多くの先生は、私が満足しているかについて関心がある」「たいていの先生はこちらが言うべきことをちゃんと聞いている」「助けが必要なときは、先生が助けてくれる」「たいていの先生は、私を公平に扱ってくれる」と回答した生徒も、学校で学ぶことは役に立つと回答する傾向があった。生徒及び学校の様々な背景要因を考慮した後でも、この正の関係はすべての調査参加国・地域で見られる。

クラスが学習を促しているかどうかについての生徒の考えも、学校に対する態度に関係している。学校の国語の授業で、「生徒は、先生の言うことを聞かない」「授業中は騒がしくて、荒れている」「先生は、生徒が静まるまで長い時間待たなければならない」「生徒は、勉強があまりよくできない」「生徒は、授業が始まってもなかなか勉強にとりかからない」と回答した生徒は、自分にとって、または自分の将来にとって学校は役に立たないと考える傾向がある。留意すべき点は、この関係が単なる社会的背景の反映ではないことで、リヒテンシュタインを除くすべての調査参加国・地域において、生徒及び学校の背景要因を考慮した後でも、この関係がはっきりと見て取れる。

学校は役に立つと考える生徒の特徴

	教師との関係が良好な生徒か	学習をより促進するようなクラスの生徒か	男子か、女子か	社会経済的に恵まれているか、恵まれていないか	移民か、そうでないか	公立か、私立か	大規模校か、小規模校か	普通教育プログラムか、職業教育プログラムか
オーストラリア								
オーストリア								
ベルギー								
カナダ								
チリ								
チェコ								
デンマーク								
エストニア								
フィンランド								
フランス								
ドイツ								
ギリシャ								
ハンガリー								
アイスランド								
アイルランド								
イスラエル								
イタリア								
日本								
韓国								
ルクセンブルグ								
メキシコ								
オランダ								
ニュージーランド								
ノルウェー								
ポーランド								
ポルトガル								
スロバキア								
スロベニア								
スペイン								
スウェーデン								
スイス								
トルコ								
イギリス								
アメリカ								
アルバニア								
アルゼンチン								
アゼルバイジャン								
ブラジル								
ブルガリア								
コロンビア								
クロアチア								
ドバイ								
香港								
インドネシア								
ヨルダン								
カザフスタン								
キルギス								
ラトビア								
リヒテンシュタイン								
リトアニア								
マカオ								
モンテネグロ								
パナマ								
ペルー								
カタール								
ルーマニア								
ロシア								
セルビア								
上海								
シンガポール								
台湾								
タイ								
トリニダード・トバゴ								
チュニジア								
ウルグアイ								
全参加国・地域の概要	正の関係 65/65	より促進的 64/65	女子 28/65	恵まれている 21/65	移民 18/49	公立 9/49	大規模校 13/64	職業教育プログラム 13/40
	負の関係 0/65	促進的でない 0/65	男子 5/65	恵まれていない 9/65	移民でない 4/49	私立 0/49	小規模校 2/64	普通教育プログラム 3/40

データなし

注: 生徒の学校に対する態度と、生徒の特徴（性別、社会経済的背景、移民）、学校の特徴（学校の雰囲気、学校の種類、規模、教育プログラム、場所）を同時に考察している。生徒の学校に対する態度は、四つの質問すべてを合わせた合成指標によって比べている。

それどころか、こうした関連には相乗効果がある。教師と良い関係にあり、学習を促すクラスで勉強している生徒は、学校が役に立つと考え、その前向きな態度が学校の雰囲気をさらに良くしているのである。

生徒の学校教育に対する態度と、生徒それぞれの背景または通学する学校種との関連は弱いものに過ぎない。

学校の雰囲気と生徒及び学校の背景をあわせて考慮すると、調査に参加した65か国・地域のうち28か国・地域で、女子のほうが男子よりも学校に対して前向きな態度を示す傾向があった。男子のほうが女子よりも学校に対して前向きな態度を示す傾向があったのは、オーストラリア、チリ、ニュージーランド、シンガポール及びイギリスのみだった。調査参加21か国・地域では、社会経済的に恵まれた生徒が学校に対してより前向きな態度を示す傾向があったのに対し、その逆の傾向は9か国・地域で見られた。比較可能なデータのある49か国・地域のうち18か国・地域では、移民の背景を持つ生徒の方が移民の背景を持たない生徒よりも、学校に対して前向きな態度を示す傾向があった。その逆の傾向が見られたのは、ブラジル、イスラエル、リトアニア、メキシコ及びパナマのみだった。

比較可能なデータのある49か国・地域のうち9か国では、私立学校の生徒の方が公立学校の生徒よりも、学校に対して前向きな態度を示す傾向があった。

学校の規模や学校のプログラムの方向性と生徒の学校教育に対する態度との間の関係という点では、一貫した傾向は示されなかった。13か国で、大規模校の生徒が小規模校の生徒よりも学校に対して前向きな態度を示す傾向があったが、2か国でその逆の傾向が見られた。比較可能なデータのある40か国・地域のうち13か国・地域で、職業教育プログラムに進む生徒の方が、学校に対してより前向きな態度を示す傾向があったのに対し、3か国ではその逆の傾向が見られた。

生徒及び学校の背景と、生徒の学校教育に対する態度との間の関係は弱いが、学校の雰囲気は生徒の態度と強い関係がある。生徒（性別、社会経済的背景及び移民の背景）及び学校（学校のタイプ、規模、プログラムの方向性及び場所）の様々な背景要因をすべて考慮すると、これらは、生徒の学校教育に対する態度の違いのうち、OECD平均でわずか2%を説明するに過ぎない。ところが、学校の雰囲気（生徒と教師の関係及び学級の規律ある雰囲気）もあわせて考慮すると、生徒の態度における違いの20%が説明されるのである。

結論：生徒の学校教育に対する態度と読解力得点には、相乗効果がある。学校教育に対する態度と学級の雰囲気も同様である。これは、ある程度、生徒自身の態度によってそれぞれの学習体験が形づくられることを意味している。

本稿に関するお問い合わせ先
担当: Miyako Ikeda *(Miyako.Ikeda@oecd.org)*
出典: Supporting data

参考サイト:
www.pisa.oecd.org
www.oecd.org/pisa/infocus

次回テーマ:
「各国はより公平な教育システムに近づいているのだろうか？」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。